公開討議
「語り合おう、
今求められる家庭の教育力」

日　　時　　平成２６年１１月２２日（土）午後２時
場　　所　　八王子市教育センター　大会議室

公開討議参加者

［幼稚園関係者］

幼稚園保護者	池 永 文 乃 さん
学校法人八王子学園 多摩なかよし幼稚園長	塚 本 吉 紀 さん

［ＰＴＡ関係者］

小学校ＰＴＡ連合会副会長	髙 橋 寛 行 さん
中学校ＰＴＡ連合会会長	後 藤 貴 弓 さん

［市立小中学校長］

市立山田小学校長	髙 橋　　洋
市立元八王子中学校長	今 井 啓 之

［教育委員会委員］

委　員　長	小田原　　榮
委　　員	和 田　　孝
委　　員	星 山 麻 木
委　　員	金 山 滋 美
教　育　長	坂 倉　　仁

---------- ◇ ----------

【午後２時００分開会】

○小林教育総務課長　　お待たせいたしました。本日はお忙しい中、ご参加いただき、誠にありがとうございます。これより、公開討議「語り合おう、今求められる家庭の教育力」を開催いたします。

本日司会を務めさせていただきます、教育総務課長の小林でございます。よろしくお願いいたします。

八王子市教育委員会では、より開かれた教育委員会を目指し、平成２０年度から意見交換会や熟議など、毎回、開催形式を変えて実施してまいりました。今年度につきましては、「公開討議」という形で実施させていただきます。

本日の公開討議は「語り合おう、今求められる家庭の教育力」と題し、本市教育委員と小中学校長、小中学校ＰＴＡ代表、幼稚園長、幼稚園保護者が、家庭教育の現状や課題を意見交換し、それぞれの立場でどういった方策や取組ができるかについて考えていただくものでございます。

それでは、開催にあたりまして、はじめに、本市教育委員会教育長 坂倉仁よりご挨拶を申し上げます。

よろしくお願いいたします。

○坂倉教育長　　皆様、こんにちは。ご紹介いただきました、教育長を務めております坂倉仁でございます。

本市では先週、市民の手づくりの祭りであります「いちょう祭り」が行われたところでございます。先週も天気が良かったのですが、今日も非常に紅葉も盛んで、しかも秋日和という、いろいろな誘惑がある中、本会議にご参加いただき本当にありがとうございます。何人来てくださるかと思っていたのですが、たくさんの方にお越しいただき、ありがたく思っております。校長先生方は、おそらく今、各学校で発表会や展覧会がちょうど開かれている時期かと思いますが、そのような中で駆けつけてくださり、ありがとうございます。

先ほど司会からもございましたが、八王子市教育委員会では、より開かれた教育委員会にしていきたいということで、これまで出張教育委員会、シンポジウム、熟議等、いろいろな形でやってまいりました。今回の公開討議も、そうした一環としての開催でご

ざいます。残念ながら昨年は大雪の関係で中止になりましたので、一年ぶりでございますが、このような形で開催することができ、ありがたく思っております。

八王子市は、平成２２年に第１次の教育振興計画であります「はちおうじ市教育振興計画　ゆめおり教育プラン」をつくらせていただきました。その中で、学力の向上や特別支援教育の充実といったものを重点項目に挙げ、また、地域運営学校の推進、耐震化の推進といったものを挙げさせていただき、着実に計画をつくったという中で、その遂行に向けて着々と実行してきました。それらの反省、また成果等につきましては、毎年点検評価でやっているところでございます。ちょうど今年度末で期限が来ることから、まだ名前はわかりませんが、新しく第２次の教育振興基本計画を今つくっているところでございまして、本日の題材であります家庭教育の関係につきましては、第２次の教育振興基本計画でもそうですし、また同時に生涯学習プランもここでちょうど切り替えの時期となっており、その両方において家庭教育の支援ということを掲げさせていただいております。おのおののプランにつきましては、１２月中旬あたりからパブリックコメントをしていきたいと思っておりますので、ぜひ御覧いただき、御意見をいただければありがたいと思っております。

その家庭教育でございますが、近年、もちろん学校だけで子どもを育てることはできませんし、地域の潤沢な教育力というのを、たくさんの知恵をお借りして家庭と三位一体でやっていかなければいけないのですが、現実的には、場所によっては地域との関係の希薄化、また親世代の方々が昔ほど子育てに対して前の代からのつながり方の難しさ等がございまして、なかなか難しい形になっております。そういう中で、どういう形ができたらいいのかを各プランの中で考えております。

先ほど「家庭教育の支援」と申し上げましたが、平成１８年に改正された「教育基本法」では、第一義的には子どもの教育に関しては家庭に義務があり、国や地方公共団体はそれをどのように支援していくかを考えなければならないということになっております。昔の社会教育の時代と違い、生涯学習の時代になりまして、自ら学んだり自ら高めていく、そういう中でどのような形にしていくかというのが課題だと思うのですが、そうは言いましても現実的にはなかなか難しいこともあるというのが事実です。

実は今日の題材を決めるときも、教育委員会定例会で、委員から事務局に対し「なぜこんなにも難しい問題を掲げたのか」という声もございましたが、やはりこういう時代、しっかりと考えていかなければならない問題だと思っております。

そういう中で、今日は５人の教育委員、小学校・中学校の校長先生、小学校・中学校のＰＴＡ連合会の役員の方々、また幼稚園の園長先生と幼稚園の保護者の方々に来ていただいております。おのおのの立場において今どんなことができるのかということ、また何が課題かということ、そのようなことを話し合っていければと思っております。結論が出ないかもしれませんが、それらを生かしながら先ほど言ったようなプランにも反映できますでしょうし、具体的な方策にも生かしていけると思っておりますので、御意見をいただきたいと思っておりますし、時間が少ないかもしれませんが、最後には皆様方からの御意見・御質問を受けたいと思っておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

○小林教育総務課長　　ありがとうございました。

続きまして、本日の公開討議のテーマである家庭教育の現状につきまして、生涯学習政策課　小柳課長からご説明させていただきます。

それでは、小柳課長、よろしくお願いいたします。

○小柳生涯学習政策課長　　みなさん、こんにちは。八王子市教育委員会生涯学習政策課の小柳と申します。よろしくお願いいたします。

生涯学習と聞いておやっと思われた方もいらっしゃると思いますし、生涯学習というと、お年寄りの囲碁や将棋といったイメージがあるかと思いますが、生涯学習は文字通り、生涯にわたって学ぶという意味があります。ですので、生まれたときの幼児教育から始まり、家庭教育も含め、学校教育、社会教育と、そういう幅広い分野を扱っております。そういった意味で、趣味や教養もそうですし、例えば町会活動やボランティア活動といったことも生涯学習活動と捉えております。人生のそれぞれのステージで学び合う活動というイメージを持っていただければよろしいかと思います。

本日、私からは、今回のテーマであります家庭教育がどのように位置づけられているのか、また、家庭教育を取り巻く環境の現状と課題という視点でお話しさせていただきます。

まず、家庭教育は生まれたとき、もしくは生まれる前から始まっていると言われております。特にこの時期は、子どもの知・徳・体の調和のとれた発達を促すことが大切であり、子どもの成長や親のかかわり方、家庭の役割がとても重要となっております。つまり、人間形成に影響を及ぼす最も基本的な教育が家庭教育であり、言い換えれば、教育の基盤は家庭にあると言っても過言ではありません。そういった意味で、子どもが基

本的な生活習慣やマナーなどの社会性、自制心、思いやり、善悪の判断をする倫理観などを身につける上では、家庭教育は重要な役割を担っているということになります。

ということは、親は家庭教育の持つ社会的責任について認識をより一層深めることが必要となります。

一方、子どもは子どもで家庭内にとどまらず、学校や地域や周りの大人とのさまざまなかかわりの中で、たくましさや積極性、また粘り強さや自発性などを培いながら成長しております。また、親自身も子どもの成長とともにさまざまなことを学びながら成長しています。よく「子育ては親を育てる」「親子の育ち」という言葉がございますが、わが子へのかかわりを通して子どもへの愛情を育てるという意味では、子育てを行うということは親という自分を育てるという貴重な体験でもあると言えます。

さて、家庭を取り巻く環境について目を向けますと、近年では都市化や過疎化の進行、少子高齢化や核家族化など、家庭環境の変化や地域のつながりの希薄化などを背景として、家族機能が衰退し、家庭の教育力の低下が指摘されております。また、いじめや引きこもり、不登校、児童虐待、ネット依存など、依然として子どもや家庭を取り巻く課題が山積しております。それに加え、家庭における子どもの数の減少、また、家族のかかわりが少なくなったり、親自身も少子化社会に育ち、子育ての経験も少ないまま親になったり、初めてのことに対する不安感、慣れないことや経験がないことへの負担感を抱えるという子育て初心者が増えており、親子の育ちを支えるはずの人間関係が弱まってきております。子どもが生まれ、親と子の関係、地域と社会との心豊かな関係を持ちながら子どもが成長していくという、ごく当たり前のように行われていたことが今や難しく、家庭教育が困難な社会になっているという現状がございます。

次に、国の家庭教育の位置づけについてでございますが、先ほど教育長からのお話にもございましたように、「教育基本法」第１０条では、すべての教育の出発点である家庭教育の重要性にかんがみ、保護者が子どもの教育に関して第一義的責任を有する。そして、国や地方公共団体が家庭教育の支援に努めるべきということが規定されております。つまり、保護者が家庭教育の責任者であり、行政は家庭教育に関しては支援する立場であるということになります。また、「教育基本法」第１３条では、学校、家庭、地域のそれぞれが教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚して、相互の連携・協力に努めるべきとあります。つまり、学校、家庭、地域は、それぞれ連携・協力を図っていくべきだということになります。

また、平成２５年６月に示された国の第２期教育振興基本計画の中で、家庭教育に関係する部分でございますが、家庭教育の担い手であります親の学びを応援するために、子育ての経験者など地域の人材を生かして、身近な場所で親が交流したり相談できる場を提供して、家庭教育支援を強化するというふうになっております。また、ＰＴＡと連携して親とつながりやすい学校という場所や子育て広場など、多様な場を活用して学習機会の拡大を行うとあります。また、将来親になる中高生と乳幼児とのふれあいなど、子育て理解学習を推進する。また、教育や福祉関係の機関とネットワークを構築して、課題を抱える家庭の相談体制、相談対応などを支援するというようなことが謳われております。

さて、家庭教育というのは道徳教育につながるものがあると思います。ここに一冊の本があるのですが、「私たちの道徳」という道徳の教材となっております。これは、小学生及び中学生の子どものいる各家庭にも配られているのですが、先日、この本を御家庭に持ち帰ってお子さんと一緒に読んだ保護者の方の感想文を拝見する機会がございました。その感想文では、「思いやりや明るい心、命といった、生きていく上で大切なことに改めて触れる良い機会になった。日々の生活を通じて、親子ともども成長していきたい」という感想がありました。とても良い本ですので、ぜひ御覧いただければと思います。

また東京都では、「心の東京革命」という取組を行っております。これは大人が責任を持って子どもの正義感や倫理観、思いやりの心を育み、大人自身が手本となって、生きていく上で当然守るべき基本的なルールを伝えるというものでございます。この中では、大人が変われば子どもも変わる、子どもが変われば未来が変わると謳われております。

また、八王子市教育委員会では八王子市の家庭教育８か条というものをつくっており、これも配布してございます。「命の大切さを伝えよう」「『早寝・早起き・朝ごはん』を励行しよう」などの家庭教育に対する８つのポイントが示されております。

最後に、繰り返しになりますが、人が人として生きるために必要な規範意識や社会性を育み、豊かなつながりの中で健全な社会を築いていくための基礎が家庭教育であります。そういった意味で、本日のテーマであります家庭教育の支援のあり方を考えるにあたりましては、親の抱えている課題を明らかにしながら、その上で親子の育ちを支援する学習機会の充実、そして支え合い、地域ぐるみで家庭教育を支援していく方策を今こ

そ講じる必要があるのではないかと思っております。

私からは、以上でございます。

○小林教育総務課長　　小柳課長ありがとうございました。

それでは、これより公開討議に入らせていただきます。

ここからは、公開討議司会である小田原委員長に進行をお願いいたします。

それでは、小田原委員長、よろしくお願いいたします。

○小田原委員長　　ただ今ご紹介いただきました、教育委員長の小田原でございます。よろしくお願いいたします。

ただ今、小柳課長から家庭教育の必要性ということについて、文科省の立場、あるいは教育基本法を始めとした基本的なお話がありました。

本日は教育委員のほかに、各学校及び各園の先生と、保護者の代表をお招きしております。先ほどお話がありましたように、教育委員会というのは公開で行われているのですが、議論の中には一般の皆様は入れませんので、教育委員会としてはこのような形を年１回以上設けることとしております。今日はそういう機会でございますので、皆様の御意見を伺いながら、より良い教育行政を進めていくということでお集まりいただいております。

それでは、非常に短い時間でございますが、お集まりの皆様にまず一言ずつお話しいただきまして、議論を深めてまいりたいと思います。

それではまず池永さんから、自己紹介を兼ねてお願いいたします。

○池永さん　　池永と申します。今日はよろしくお願いします。

昨年の夏より２年間の任期で、市の子ども子育て審議委員会の幼稚園の保護者の市民委員として会議に参加させていただいております。幼稚園では、今年度ＰＴＡの三役のほうで、少しですがＰＴＡ活動に携わっています。

私自身の紹介としては、今館町在住で、小学校２年生と年長の２人の息子、それから主人の４人の家族で過ごしております。実家が八王子なので、今日のような場合には実家に子どもを預かってもらうなどして、子育てに祖父母が参加し、協力しながら子育てをしております。

今回の家庭教育の必要性についてですが、私は今、下の子が幼稚園ですので乳幼児期のことを考えてみると、先ほどのお話にもございましたが、必要性というよりは子育てすべてが家庭教育と捉えて過ごしておりました。上の子が小学校に入り、今回の討議の

こともあって、家庭教育を改めて考えたときに、子どもが親元から離れて学校に行く、また学校活動の集団の中でではなくて、学校の時間外でも子どもが一人で過ごす場が多

くなってくる中で、親がすぐにいない場で悩んだときやいじめやトラブルがあったときに、一番近くにいる親が助けてあげるのが自然であり、子どもにとってそれが安心につながり、またのちのちの自信につながっていくと思っております。

そういうトラブルなどが子どもに起こったときに、そのときだけではなくて、親が家庭教育としてしつけというか、日常生活の中で親から子どもへ伝えていくということをしていれば、いざ何かが起こったときに、親からしても、結果的なものだけを伝えるのではなくて、そのことに対して社会的に良い解決に向けてこういう対処が必要だよ、こういうことをしていこうねと、親から子へ伝えたいときにその子にかける言葉がわかるだろうし、子どもにとっても普段から親の教育を受けていれば、それがトラブル解決などの手立てとなって子どもの中に入っていく。それが行動に移せるようなものにつながっていくと思い、家庭教育の必要性はそこにもあるのではないかと思いました。

以上です。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

続いて、小学校ＰＴＡ連合会の高橋さん、お願いします。

○高橋さん　　小学校ＰＴＡ連合会の副会長をしております高橋と申します。

本来ですと、会長の秋間が参る予定でしたが、「あなたのほうが話すのが得意だから行ってきなさい」ということで私が参りました。会長としっかりすり合わせをしてまいりましたので、しっかりやっていきたいと思います。

私は元木小学校という、恩方の方にある非常に自然に恵まれた小学校でＰＴＡ会長をさせていただいております。その関係で本日は素晴らしい機会をいただき、ありがとうございます。

さて、家庭教育について私の立場で感じるところということでお話をいただきまして、家庭教育とはなんだろうというところから入っていきました。先ほども出ましたが、「早寝・早起き・朝ごはん」というようなところから始まるしつけのようなものなのかなという気持ちでいます。そしてこれがとても大切だということは、皆さん重々御承知のことだと思いますが、私も一番大切だと思って、上は２１歳の子がいますけれども、しっかりと育ててきたつもりです。結果的に家庭教育になったと今思っていることは、

私の父親や母親から教わってきたこと、そして周囲の皆様から教わってきたことを、自分自身の思ったとおり、そのまましっかりと自分の気持ちで伝えていくことが一番重要なのかなと思いました。そしてそれをずっと続けてきたつもりです。その結果はそんなに問題なかったので、こういうやり方でいいんだろうなと思って育ててきました。

今日は、先ほど小柳課長からもお話がありましたとおり、また今日の題名のとおり、今求められる家庭の教育力ということでございますから、どういうことになるのかなと思ったのですが、第一義的には家庭に責任があるというようなことも出てきましたし、少し怒られてしまっている感じだなという気持ちで今いるのですが、いや、そうではないんですよということを軸に、私は今日ここに座っているつもりでいますので、しっかりと答えてまいりたいと思います。

よろしくお願いいたします。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

それでは、後藤さん、お願いします。

○後藤さん　　皆さん、こんにちは。私は、八王子市立中学校ＰＴＡ連合会で会長をしております後藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

所属の学校は第六中学校になります。私は生まれも育ちも八王子で、出身校は第三小学校、第六中学校で、幸せなことに現在出身校でＰＴＡ会長をさせていただいております。私自身は子どもが４人おりまして、実の母と自分の家族の７人家族、三世代で生活しております。一番上は２１歳になりまして、その下が大学一年生、その次が高校三年生、一番下が中学校一年生です。

家庭の教育力ということを、皆さんすごく難しく考えられているのだと思うんですが、やはり子どもに対するしつけなのではないかなと思っていて、ではどうしてそれが必要なのかというのは、たぶんその子たちが社会に出てちゃんとした社会生活を送っていくために、小さい時期から当たり前のことをちゃんとできるような子どもに育てなければいけないということで、とても重要なのではないかなと思っております。いつまでも親の手元に置いて子どもを育てていけるわけではないので、いつか子どもが自立するために、自分の力で生きていくための術をちゃんと教えてあげることが家庭教育なのだと思います。

今、小学校や中学校で子どもたちにアンケートをとると、自分の行動に自信がないという子どもがすごく多いです。でも、それはちゃんと小さいときから親がその子のこと

を認めてあげて、「それでも大丈夫なんだよ」という言葉をかけてあげたりだとか、あと悪いことをしたときにはちゃんと叱ってあげるということをしていってあげれば、自然と身についていくんじゃないかなと思うのですが、今、わりと若い保護者の方々を見ていると、褒めることは褒めるけれどもあまり叱ったりはしなくて、すごく打たれ弱いお子さんが多いように見受けられます。でも、大人になって社会に出たときには、とてもつらいことがたくさんあると思うので、そういうことをちゃんと乗り越えていける力をつけていってあげることが、親の責任として必要なのではないかと思っております。

今日はどういう話に発展していくのか私自身も楽しみなのですが、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

それでは、塚本園長、お願いします。

○塚本園長　　御紹介いただきました、多摩なかよし幼稚園の園長をしております塚本と申します。

小柳課長からいろいろなお話がありましたので、私は少し具体的なことをお話させていただこうと思っております。今の幼稚園ではどうなんだろうか。幼稚園における家庭教育という視点、立場からお話をということでしたので、そのようなお話をさせていただきます。

私自身はこんなふうに考えております。若いお母さま方がたくさん幼稚園にいらっしゃるわけですけれども、子どもが泣く理由がわかる保護者、こういうお母さまはすごく素晴らしいお母さまだなと思っています。なぜかというと、その裏には子どもと保護者と間に信頼関係、言うなれば両方が認められる間柄があるのではないかと思うのです。私は、これが家庭教育の基本であり、小さいときにそういう家庭の中で育っていけば、きっと小学生になっても保護者の言うことに聞く耳を持つ、また中学校に行っても、今度はもう少し話のできる間柄になっていくのではないかと思っております。ですから、幼稚園ではそういうこともすごく大事だと思っています。

その一方で、家の中ではルールというものがあったほうがいいと思います。そのルールをお互いが守ること、そういう感覚が小さいときから子どもの中に育っていくと、やがて社会でのマナーというものを聞き入れられるような子どもたちの心と力がついてくるのではないか。こういったことから、ルールが家庭教育の中においてあったほうがいいのではないかなと私は思っています。

では、その裏には何があるか。それは夫婦の間というものがあるのではないかなと見ています。と言いますのは、やはり御両親が仲良ければ、子どもに対しても愛情を持った言動が常日頃から行われていくのではないか。そういう仲が良い御両親からかけられた言葉というのは、納得のいく言葉として受け止められ、また納得のいく心を持てるのではないかと思っております。これが家庭教育の、幼稚園の立場から見るところではないかなと思っております。

以上です。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

それでは、高橋校長、お願いします。

○高橋校長　　皆さん、こんにちは。小学校の校長会代表でこの会議に参加させていただきました、山田小学校校長の高橋と申します。八王子では美山小学校と山田小学校で校長を８年務めさせていただいております。校長会の中では事務局長ということで、いろいろな市内の小学校の校長と連絡を取り合いながら、また情報交換しながら、小学校の教育をどのように充実させていくかということでさまざまな仕事をさせていただいている立場で、今日この会議に出させていただきました。

家庭教育の必要性ということでお話をさせていただくのですが、家庭の基盤というか、本当に一番大事なことは、私は愛情を注ぐことだと思います。保育園・幼稚園・学校のいずれも、ある家庭のお子さんをお預かりして教育する場です。そこには、いろいろなお子さんが来ていますけれども、子どもたちが家庭から出た別の社会の中で生活するときに、子どもたちが、自分が親に愛されているという思い、そういうことを実感しているということがとても大事だと思います。その上に、それぞれの保育園、幼稚園、学校の中で教員等が子どもたちに愛情を注いだりして子どもたちの心を育てていく。ですからそこは、学校と家庭との両輪ということをよく言われるのですが、やはり子どもが家庭に帰って、自分が親に愛されている、親の懐に入ってすごく心地がいい、そういう子どもは、俗に言ういい子というかお利口さんというか、学校の中でもあまり問題を起こさずに育っていく子どもが圧倒的に多いかなと思っています。ですから、まずは愛情をうんと子どもたちに注いでいく場としての家庭の役割、必要性はとても大きいと思います。その愛情を注ぐ場というバックボーンの中で、知・徳・体ということで、学校はまず学力をつけることがすごく求められています。皆さん御承知のように、小学校でも中学校でも全国学力調査というのを行って、自分たちの子ども、地域の子どもたちの学力

はどうなのかということをここで分析しています。それから、体力が低下しているということも問題になっておりますので、体力をどうやってつけていくかということも、学校の体育教育の大きな課題になっているのかなと思います。あとは心をどうやって育てていくか。先ほど「私たちの道徳」という本の紹介がありましたが、それも子どもたちの心を耕していくひとつの材料になっているのかなと思います。

そういう中で、小学校で言うと、まずは生活習慣をしっかりと付けていただきたいなと思います。自分のことはちゃんと自分でできるお子さんになってほしいなと。それをちゃんと家庭で育ててほしい、しつけをしてほしいと思っております。やはり家庭から外に出ると、基本、自分のことを全部自分で処理していかなければいけませんので、そこが大事なところだと思います。

それから２つ目は、学習習慣です。特に小学校に入ると勉強が始まります。まず１００パーセント、各担任は子どもたちに家庭での学習の習慣をつけるために宿題を出します。宿題に取り組むことを通して、家でも勉強するという習慣を家庭でつけていただけると、学校としては非常に子どもたちの学力を伸ばす上で助かるかなと思います。勉強の中には、読書の習慣ということも含まれるのですが、多少子どもたちにとってはつらいことになるかもしれないのですが、きちんと家庭の中でそういうことを育てていただく、支援していただくということがとても大事だと思います。

３つ目に、親が生きてきた経験をたくさん子どもたちに伝えてもらって、その中で人とどのようにかかわったらいいのかということも教えていただけるといいのかなと思います。学校になると、少ないクラスでも１クラス２７、８人、多いクラスですと４０人という数の中で子どもたちは生活をします。当然その中で嬉しいこともあるし、つらいことや悲しいこともあるんですけれども、もちろん学校はそういうことに対してきちんと対応していきますが、やはり家庭で、子どもたちが人にどうやって対応したらいいのか、嬉しいときはどう表現して、逆につらいときはどうやってそれを克服したらいいのか、子どもに親から教えていただけると、あるいは励ましていただけると大変いいのかなと思います。

最後に、子どもたちに自信や夢を与える場であってほしいと思っています。特に中学生、高校生レベルでの意識の調査で、諸外国と日本の子どもたちを比較すると、日本の子どもたちの自尊感情というのが、たいていどの統計でも低くなっております。その原因が何にあるのかというのが、まだ私の中でも十分に分析できていないのですが、先ほ

ど愛情ということを申しましたが、それと同時に自信を育てる、あるいはやる気を出させるというような声かけなり、親と子のかかわりなり、それが子どもたちが小学校、中学校、高校、大学、社会人へと育っていくときに、とても大切なことになると思います。ですから、繰り返しになりますが、まずは愛情をたっぷり注いでいただいて、その上で、子どもたちが育っていくために必要なことをしっかり押さえて育てていく場というのが家庭教育の本旨になっているかと思います。

以上です。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

それでは、今井校長、お願いします。

○今井校長　　皆さん、こんにちは。中学校長会を代表しまして、元八王子中学校校長の今井と申します。よろしくお願いします。

私も中学校ＰＴＡ会長の後藤さんと同じで、第三小学校、第六中学校出身なもので、地元に帰って校長を務められるというのは、とてもいいなと思っております。私は、八王子以外のところでは、調布、小平、福生、学校自体で言いましても、八王子市内だけでも５つの学校を回って、地域や学校によって違うんだなというのが本当によくわかります。今日のテーマが家庭の教育力の話になるわけですが、学校と家庭がどのように役割を分けて子どもたちを育てていけばいいかというようなところを、今日はこの中で皆さんと考えられたらいいかなと思っております。

家庭の場合は、個として育てていく。学校の場合には、どちらかというと集団の中で個人を育てていくところがあります。ですから、よく子どもたちが、学校の規則は多くて面倒くさいと言うのですが、やはり集団の中でのルールというのが必要なんですね。そういうことを教えていく場かなと思っております。家庭の中で求められるものというのは、やはり親の生き方だと思います。親の生き方が子どもに反映されてくるというふうに思います。そして、中学校は子どもたちにとって最後の義務教育の場なので、ここを出た後に９０パーセント以上の生徒が高校に行きますので、すぐに働くということはないのですが、でもいつ社会に出てもいいような、最後の学校かなというふうに思っております。そういう意味では、中学校では今皆さんがお話になったような規範意識であるとか、社会のマナーやルールといったものをしっかり取り込んで、それを実行できるというものを身につけさせていく。もちろん学力という点は当たり前のことなので、そこは少し置かせていただいて、その中でポイントになるのは、どのように育てられてき

たかというところだと思います。やはり人の生き方というのは大きいなと思います。高倉健さんのニュースを見ていて、ここにいる皆さんはそういう世代の方が多いので、あの方の映画を見て自分の教訓にされた方も随分多いのではないかと思いますが、家庭において親の姿勢を見て、子どもは育っていくのかなと思います。ですから、額に汗して親が働いていれば、子どもはそれなりに育ってくると思うんです。ところがそうでない場合などがあると、子どもの育ちはなかなか難しいだろうと思います。

今日はまだたくさん議題があるので、皆さんで考えて、いろいろな意見を出していただければいいと思います。

よろしくお願いします。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

ここからは、教育委員になります。金山委員、お願いします。

○金山委員　　皆さん、本当に今日はありがとうございます。

こういう会があるとすごく一生懸命勉強してくるんですが、今日はどういうお話があるのかわかりませんし、普段の蓄積でお話ししようと思い、実はあまり予習をしてきておりません。家庭教育の中身については今皆さんがおっしゃったとおりのことではないのかなと思いますので、少し視点が違うのですが、実はここ一年ほど、本当に家庭の教育力は希薄になったのかというのが私の中で疑問で、ずっと考えている課題の一つなんです。今、小柳課長からもそういうお話がありましたけれども、まず一つは、保護者に第一義的な子育ての責任があると言われてしまっていることが、すごく厳しいのではないかと思っています。もちろん最終的な責任は保護者以外にとる人はいないんですけれども、ただ昔は、子育てをしていたのは保護者だけではないですよね。大きな家族があったり、地域があったり、困ったときには誰かが手を貸していた。もっと時代をさかのぼれば、それこそ寺子屋などご近所で教わる時代があったわけですけれども、今本当にそれがなくなってきているのかなという、そういう時代において、なおさら親だけだよと言われたら、それはとても厳しいんだと思います。それに、本当に家庭の個々のお父さん、お母さんに教育力がないのかと言うと、私はそうではないんじゃないのかなと思います。アンケートや調査を見ましても、子育てで自分が成長していっていますとか、子育てで人間関係が広くなって、子育てで得るものがたくさんありますという方が本当にたくさんいらっしゃって、総務省の調査でも７割、８割の方がそういうことをおっしゃっています。だけど反対に、同じくらいの方が子育てに不安がありますとか、子ども

の教育と将来のことに悩んでしまいますということも答えていらっしゃいますので、個々の方はみんな一生懸命やろうと思っているんだけれども、ただそこで、昔のように黙っていてもいろんな手が出てくるという時代ではないのだろうなと思っています。なので、そのつながりのところを今は人為的につくってあげなければいけない。そうすることによって、おのおのの御家庭がいろいろなものを吸収する、またはアウトプットしてお子さんの子育てに家庭の中で生かしていただける力をつけていく。そういう時代ではないかなという思いでいます。それで、何が大切かと言いますと、今お話もありましたけれども、子どもたちが安心している、つまり大人が常にかかわってくれて、見ていてくれる安心感というものが子どもたちの自尊感情を育んだり、それから踏ん張ってみようという自律した心を育んだりするものだと思うのですが、そのためには何が大事かというと、育てている保護者、もう少し言えば学校の先生や地域の方もそうなんですが、特に保護者の方が安心しているということが必要だと思うのです。安心して子育てしていくために、自分が困ったときに相談できるとか、悩んだときに手を貸してくれるという方が近くにいる、何かがあるということが必要だと私は思っているのですが、そのためのつながり方、保護者同士であるとか、保護者と地域であるとか、もちろん保護者と学校のつながり方というものを皆で考えていく。今おのおのの分野で、先生もそうですし、ＰＴＡを始め保護者も一生懸命やってくださっていますが、なんだか少し空回りしている部分があるのかなという気がしていますので、そこを行政も何かの形でお手伝いしながら、安心して子育てできる場というのをつくっていくことが、まず家庭教育を進めていただくための第一歩かなと感じているところです。

以上です。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

それでは、和田委員、お願いします。

○和田委員　　教育委員の和田でございます。よろしくお願いします。

私は、八王子で３人の子どもを、幼稚園、小学校、中学校と、育てさせていただきました。幼稚園の先生にも小・中学校の先生にも、大変お世話になったなと思っております。私自身は、中学校の教員や校長を経て、行政も大分経験したのですが、現在は大学で教員養成に係わっています。これからの先生方がどんな力をつけなければならないのか、そういう観点で指導しています。指導する背景として、私の専門の内容として、生徒指導と進路指導をバックグラウンドにしているんですけれども、教員を目指す学生だ

けではないのですが、子どもたちが育って、社会に出る直前の姿を大学の中で目の当たりにしているときに、家庭での生活が、今大学生にどうつながってきているのか。私はいくつかの大学で授業を持っているんですが、学生によって、大学によって、本当にその姿が違うんですね。だんだん歳を重ねていくうちに、家庭での問題が次は幼稚園、小学校での幅まで広がってきて、中学、高校、大学になるにしたがってどんどん、いわゆる格差と言われるようなことにつながっていく現象を見ています。非常に学習意欲があったり、学習の方法をきちんと身に付けている学生もいれば、ほとんど一日の生活がスマートフォンで終わっているような学生まで見ているときに、原点である家庭教育で何をすべきかということを改めて考えさせられているところです。

先ほどからお話をいただいている中で一つ感じていることは、やはり共通認識は同じだなということです。家庭教育の課題というのは、保護者がどういう役割や、あるいはどういう課題を持ちながら子どもを育てているのかという意識の問題とか、あるいは具体的な取組をどこまでやっているのかということが問われているのだろうというのが共通認識としてあったのではないかと思います。具体的なことはそれぞれの方々が発表されているので、そのとおりだと思っております。

もう一つ、課題として私自身が持っているものとしては、家庭教育は家庭の中の問題ではなくて、将来子どもたちが外へ出て、社会の中でたくましく自己実現を図る、つまり自分のやりたいことがきちんとできるという子どもにするために、家庭の中でどういう関わりを親がしていったらいいのだろうかということが大事になってくるのではないかなと思います。その中で、３つほど挙げたいと思います。

一つは、これもすでに出てきましたが、子どもを叱らない親が出てきた。褒めることはできるのだけれども叱ることができない。怒る親はとても多くなりました。感情的になって怒ったり手を上げたりする親は多くなりましたが、叱る、つまり説諭をしたり説明をする親が少なくなってきたのではないかと思います。経験を踏まえて、きちんとなぜこういうことになっているのかを説明する。今、小学生向けに親への質問を投げかけるような本が売れているのですが、「人の命と動物の命とはどっちが大切なのですか」と親に聞いたときに、親がどう答えるかというような、本当に具体的な内容についてのことが一つ出ています。「なんで中学校や高校や大学に行かなければならないの」というときの質問にどう答えるのかというように、親がきちんとそれに答えられるかということも含めて、子どもを叱る、あるいは叱らないで説明をする親が少なくなっているよ

うに思います。

２つ目は、子どものため主義という言葉が今出てきています。子どものため主義というのは、子どもへの教育投資が過剰に進んでいるということです。お父さん方が非常にお小遣いが少なくなって、家の中で居場所がないにもかかわらず、子どもたちの子ども部屋が立派になったり、塾へ行くお金がどんどん増えていくという、そういう現象を指していて、これはお母さん方が子どもたちに投資をしているわけですよね。初めは投資だと思っていたんですけれども、今の分析では、投資ではなくてお母さんの趣味のような、つまり子育てが毎日の生活の楽しみになってしまっていて、決してそれは子どもの将来を考えているということではないという指摘がされています。ピアノや英語を習わせていますが、中学生になってピアノをやめたいと言えばすぐにやめさせてしまう。英語をやろうとしても、英語も途中でもういいと言えば、ああそうなのという話になる。子どものためを考えた投資ではなくて、親自身がそれを楽しみにしているということです。

３つ目の課題は、家の中主義というのが言葉として出ています。親離れできない子です。つまり、どこに行っても自分の家と同じ生活をしているということ。その辺に平気で座っている。食べながら歩く。服装にしても、寝起きのような格好で町の中を歩く。その先にあるのが、電車の中で化粧をしたり物を食べたりする姿だと。つまり、社会に出て行ったときにこういう姿であるべきだというものを、家庭の中でしっかり区別することができない。家庭と社会とのボーダーが見えにくくなっている中で、家庭の中の生活そのものが外へ出てしまっている。つまり、家庭の中でやるべきことと、社会でどう見られるか、どういうことを身につけていかなければいけないのかという親の認識、つまり社会性を背景とした親の家庭での教育が非常に不足しているなと思います。

この後の議論の中でいろいろ具体的な話が出てくると思いますので、よろしくお願いいたします。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

最後に、星山委員、お願いします。

○星山委員　　皆さん、こんにちは。星山です。

私が演説を始めると２時間くらいすぐに終わってしまいそうなので、本当に簡単にしたいと思いますが、私自身は中学校２年生の息子が一人いまして、主人は小児科医です。私は彼が留学していた４年間、一人で子育てをしてきたという経験がありまして、息子

が０歳から４歳まで、地方の全く友達もいないところで子育てをしていました。そのとき、本当に孤独でした。そういう経験をしたこともあります。また、御存じの方も多いかと思いますが、私は障害の最も重いお子さんや支援が必要なお子さんの支援を専門としておりますので、養育センターで働いたり、養護学校で教員をしていた時代もありまして、結局お子さんが幸せになるためには御家族を支えないとだめなんだということが、私の３０年間のテーマになっています。その後、自分で勉強して母子保健学というのを専門にしてきまして、欧米にも勉強に行き、３年ほど住んでいました。今でも１年に１回は必ず、先駆的な子育て支援をしているという国などを見るようにしています。

私が今感じていることを簡単にお話したいと思うのですが、日本の家庭というのは、とても真面目で一生懸命で自分の責任をすごく感じる国だなということです。私が今思っているのは、親が子に何をするかというのはもちろん大事なのですが、その親子同士、家庭同士をどうやっていい関係につなげていくことができるか。ここが、行政や私たちのような教育関係者や今日お集まりの皆さんのように教育に関心の高い皆さんのお知恵を拝借しなければならないところではないかと、私はずっと思ってきました。家庭も、言ってできる家庭はいいと思うんです。教育力がある家庭は確かにありますが、私がずっと支援してきた家庭は、やりたくてもできない、どうしてもそれができない家庭があったときに、周りの人たちがどうやってその親や子どもたちが孤立しているところを助けられるのかなという、その仕組みづくりについて考えてきました。私からは、３点大事なことがあるなと思っています。

１つ目に、人と人とをきちんとつなげる能力のある人材を育成しなければいけないだろうということです。いろいろな言い方がありますが、コーディネーターという職種があると思います。私は欧米をいろいろ見てきましたが、日本はコーディネーターという職種を育成してこなかったんだなと思いまして、個々には素晴らしい実践がたくさんあり、素晴らしい過程の学校もたくさんあるのだけれども、地域の中を見たときにすごく格差が広がっている。ではどうしたらいいかと言えば、人と人とをきちんとつなげるスキルが必要だと思います。私は、こういう人たちはやはりきちんと地域で育成していかないと難しいのではないかなと思っています。

２つ目は、実働部隊です。一体誰が助けるのかということです。家庭の教育力もかなり格差があるので、できる家庭の方はぜひ力を貸していただいて、かんばってもできない家庭にもいい教育力を巻き込んでいく仕組みをつくらないと難しい。そのためには、

文部科学省のものには、子どもサポートリーダーという文言が出てきましたが、八王子は、私はいろいろなところでかかわっているのですが、とても皆さん熱心と言うか、人のために頑張ろう、子どものために頑張ろうという方たちが溢れているところだなと思っています。この方たちをつなげる役として、コミュニケーション能力、あるいはニーズを探してきてきちんと仕組みをつくるという辺りの人材が育ってくるといいのではないかと思います。

３つ目は、何をするかということだと思うのですが、保護者の方たちが出てこないですよね。私は支援の仕事をしているので、一番困難で助けたいと思う方に限って来てくださらない。ではそこでどういう仕組みをつくるかと言えば、私はやはりきっかけは楽しいことではないかなと思います。教育ということをお伝えするのに奥は深いのですが、まずはみんなのその地域に出てくるといいことがあるよということで、そこでは、私たちが子どもの時代にあった楽しかったことというのをもう一度地域で再生していくことによって、結果として人が集まり、子どもの教育力のような大切なものが地域に伝わっていくのではないかなと漠然と考えています。

以上です。

○小田原委員長　今日お集まりの皆さんの、それぞれの家庭教育あるいは家庭ということについての思いを語っていただきました。

前半の皆さんは、特に家庭教育あるいは家庭ということの役割とか意味といった点で、後半の教育委員の皆さんのほうでは、現状の課題、あるいはそれに対してどうしたらいいかというような点にまで広がっていくわけなのですが、ここで教育長、先ほど御挨拶いただいたわけですけれども、皆さんのお話を伺って、何か教育長としての思いがありましたら、どうぞ。

○坂倉教育長　私の思いと言うよりかは、もう少し皆さんでお話していただいたらいいかなと思ったことが２点あります。

一つは、褒めることと叱ることの関係なのですが、一般的に言って、非常に子どもに甘い御家庭の方ほど叱らないということをおっしゃられているんですが、一方で私がよく言っているのは、大人もそうなのですが、子どもは褒めてあげないと伸びない、自信を持てないということです。先ほど調査の話もあって、アメリカ人は自信満々ですけど日本人にはそれがないので、そこのところはもちろん個別に違うのでしょうけれども、どうなのかなというのを少し聞きたいなという気がしました。私自身は本当に人を褒め

るのが苦手なものですから、今あえてどこに行っても「褒めなさい」と言っています。もちろん理由がないと褒めてはいけないんですけれども、理由があるときには褒めなさいと言っているのですが、確かに一方で、本当に悪いことをしたときに叱れない、感情で怒ってしまうだけという方がいらっしゃるのも事実なので、その辺のところをどうしたらいいのかというところを聞きたいと思いました。

あと、結構出ていたなと思ったのが、公、つまり行政を含めて学校の役割と家庭の役割ということで、先生方はどちらかというと、集団ルールなどは我々が教えるから、最低限の生活習慣は家庭で教えてくださいというようなお話があったのですが、保護者の方々の意見を聞きますと、先ほどの第一義的な家庭の教育力ということに対して、そうではないだろう、もう少し学校や行政がやることがあるだろうというような御提案と言いますか、いろいろと言いたいところがおありだと思ったので、ここをもう少し深めていくと面白いかなと思いましたし、それを聞いて、プランに掲げるなり教育委員会として取り入れていくか、そういうことで参考にしたいと思いましたので、今聞いた中では立場によって少し違っていましたし、もう少し聞いてみたいと思いました。

○小田原委員長　　教育長からそのような注文が出ましたが、いかがですか。

池永さんから順によろしいですか。

○池永さん　　私はまさに今、子どもが男の子二人で活発な時期なので、非常に悩まされている時期です。それに加えて、小学校入学前というのがこの時期私の意識の中でもすごくありまして、年長に上がった時点で次は小学校というのが頭にあって、正直、この一年間の前半は、何か悪いことがあったら感情的に叱っていることの方が多かったです。イライラしてしまっていると、褒めるということがなかなかできないんですが、以前ちょっとしたことで病院に行ったときに、隣のお子さんが少し障害があったのか、走り回っていたんですね。お医者さんもお母さんと一緒についていて、「この子はこういうところがいいところだから、褒めてあげることをほかの兄弟よりも２倍、３倍してあげるといいよ」と言っていたのをたまたま私が隣で聞いていて、そこで私もはっとして、やんちゃなことは男の子だからある。それも心に置いて、褒められるところは、今まで一回だけ褒めていたところを言葉のパターンを変えて、２つ、３つのパターンで褒めるというような褒め方をしている真っ最中です。

○小田原委員長　　高橋さん、どうぞ。

○高橋さん　　噛み合わなくなってしまったら申し訳ないのですが、事前のお話が、現状の課

題と家庭の教育力向上のため求められているものは、というところでしたので。

○小田原委員長　　そうですね。教育長から、褒めることと、それから先生と保護者との違いというところがございましたので、その点について触れられたら触れてほしいということで、その後で、課題とそれに対してどうしたらいいかという部分でお話を進めていきたいと思いましたので、今は、教育長の注文についてどのようにお考えかということだけお伺いしたいと思いますが、いかがですか。

○高橋さん　　先ほども申し上げましたけれども、いろいろ本を読んだり、こうしたほうがいいとか思って褒めたり叱ったりしても、人それぞれ人格が違いますから、そのとき感じたままを伝えるということが一番重要だと思ってやってきました。子どもも、素晴らしいときには驚くほど素晴らしくて、自分がこの歳のときこんな事できなかったよなと思って、思わず感動して褒めてしまいます。褒めようと思って褒めているわけでもないわけです。褒めようと思って褒めると、実は子どもは親が何を考えているかわかったりするんです。自分が子どものときも多分そうだったと思います。なぜ夫婦げんかしているのかもよくわかりましたから。子どもはよく知っていて、ただ表現力がないだけなんだと思っていましたから、叱るときも同じですよね。何も考えずに、怒らなければいけないな、叱らなければいけないなと思ったときに叱ってきていまして、それは必ず素直に子どもは聞く。そういうことに徹してまいりましたので、そういうようなところが軸ではないのかなと思います。

以上です。

○小田原委員長　　それでは、後藤さん、どうぞ。

○後藤さん　　私も子どもが小さいときの子育てを考えると、４人子どもがいたので本当に大変な毎日でした。自分も仕事をしていましたので、自分に余裕がないと感情で子どもを叱ってしまったり、今体罰がすごく問題視されていますが、一番上の子には手を上げてしまったこともあります。ただそれは、自分が叩いてしまって手もすごく痛いので、泣きながら叱ったりしました。だけどそれは自分の子どもへの愛情があったから、おそらく子どもにもちゃんと伝わったのではないかなと思っています。中学生になると、褒めるというのはすごく難しくて、先ほど高橋さんもおっしゃっていましたが、今の中学生は親のことをすごく見ています。テストの点数が良かったから褒めても、「白々しいな」という感じで見られてしまいます。褒めるということに関して日本人は本当に下手だなと思うのですが、あるテレビ番組か本か忘れましたが、褒めるのが難しかったら

「ありがとう」という言葉で自分の気持ちを伝えてみてはどうですかというようなことがあったので、私は今できるだけ、日々の生活の中で子どもに何か頼んで何かしてくれたときには、ちゃんと「ありがとう」と自分の気持ちを伝えるようにしています。教育の結果はすぐ目の前には見えなくて、多分この子たちが大人になって社会に出てから結果がわかるのだろうと思いますけれども、ちゃんとした社会人になれるように、日々そういうふうに奮闘しております。

○小田原委員長　　園長、校長先生のほうで、何か付け加えることがございましたら、どうぞ。

○塚本園長　　私は子どもが３人いまして、外国生活もかなり経験しております。いろいろな国の子どもたちの育て方を見ております。そういうことを経験しながら、今幼稚園にいますけれども、幼稚園の子どもというのは３歳から６歳までですので、人間の将来の一番の基本をつくるときです。だから、幼稚園は学習指導要領ではなくて教育要領ということで、心の部分をつくるということをしております。そういうことから考えると、褒めるということは、幼稚園の子どもにとっては自分が心を開くことのきっかけをつくります。つまり、いけなかったことややってしまったことを「ごめんね」と言える心をつくっていく上で、褒めるということがきっかけになります。しかし、褒めるということは、だんだんと大きくなるにしたがって果たしてこれがいいかどうかということはあると思います。つまり、発達段階というのを加味したところを常に持っていて、小学校、中学校、高校とだんだんに上がっていくにしたがって、その言葉というのがあるのではないかと思っています。私が思うに、褒めるということから、次に認められるということに動いていくことがあると、子どもというものはかなり正直に自分の心を出してくるのではないかと日ごろ思っております。そしてさらに、その子どもは親あるいはいろいろな方々など、聞く耳を持ってくれた人に対しては心を開いてくれるのではないかと私は思っております。そのようにできるような、いろいろなところでの環境をつくってあげることが大人の役目であり、そしてそのようなことができる心をつくってあげるのが家庭教育であり幼稚園教育であると思っています。

○小田原委員長　　それでは、校長先生お二人のうちどちらかの方、お願いします。

○高橋校長　　簡単に言うと、小学校も中学校も集団の中で教育していますので、きちんと子どもを正していかなければならないのは、集団のルールを破ったときだと思います。学校なり社会なりのルールを守れないとか、人を傷つけてしまう、それは暴力もあるし言葉もあるし、あとは人に迷惑をかけてしまうというときには、小学校も中学校も、学校

として、教員として、きちんと子どもを正していくということが学校に課せられている大事な役割だと思います。ただ、子どもたちはものすごくエネルギーを持っています。例えば運動会や体育祭などエネルギーを発散する場というのはどの学校もあるのですが、そういうときに子どもががんばってエネルギーを発散して、それを褒めて、子どもたちが褒められる心地よさというのを感じてもらうということも、学校でしかできないことかなと思います。家庭では、もっと一人一人のお子さんに着目して褒めてあげることができるんですが、学校もそうなんですが、それよりは集団で協力していいことを達成したとかがんばったとか、そういう場面でいろいろなことをピックアップして褒めてあげるということが、学校と家庭の大きな違いかなと思っています。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

教育長からの問題提起について、それぞれの立場からのお話を伺いました。よく言われることに、「３つ褒めて、１つ叱る」というようなこともありますし、「叱る」と「怒る」とは違うんだというような話もありますが、いずれにしても、褒めることも難しいし、叱ることも難しいということがあろうかと思います。

一通り皆さんにお話しいただいたわけですが、家庭教育の必要性、あるいは家庭教育とはどういうものかということについては、おおかたの皆さんのお話が一致してくるだろうと思います。これは、小柳課長が話したことと大筋重なってくるわけです。先ほど、家庭の教育力の必要性から、さらに家庭の教育力の向上のためにという話が出てきたのですが、向上というようなことを言うと、家庭の教育力というのは低下しているのかという話になって、先ほどの金山委員のお話にもなるわけです。その辺を踏まえながら、現在の家庭の教育、あるいは家庭の課題ということを明らかにして、それに対してどういう支援や対策が必要であるかというようなことを具体的にお話していただきたいと思うのですが、これを話し始めると２分ではとても足らないでしょうけれども、できるだけ簡潔にお話していただければと思うのですが、いかがでしょうか。

これも、池永さんからお話しいただいてもよろしいですか。

○池永さん　　現状ということで、家庭教育と言われて全体的なイメージとして私が持つイメージは、子どもに夢を与えるとかそういうプラスになるイメージではなくて、家庭でのしつけをしっかりしなさいというように、私としてはしつけという捉え方がすごく強いです。プラスになる、子どもを豊かに育てるという面での家庭教育というと、子育てをする前は、例えば子どもを豊かにするための行事や祝日、あるいは日本の文化だとか、

そういうものは幼稚園や学校で活動していく中で自然と身についていくものなのだろうと思っていました。でも実際はそうではないというか、私たちも家の中でもっとやるべきことがあって、家庭教育として今求められているんだなと、今回のことを考えて思いました。

個人的な現状で考えてみますと、先ほど塚本園長のお話を聞いてどきっとしたんですが、夫婦の仲の良さというのがつながっていると言われたのですが、家庭で生活していくと、コミュニケーションとか会話がどんどん減っていって、そういうことが家庭教育に影響していると気にはなっています。

あと、幼稚園の保護者の立場として考えたときに、小学校入学前なので、小学校の集団生活に入るためにどんなことが必要かという思いで子どもに何かをしているつもりでも、５、６歳の時期というのはとても成長の幅が大きく、他の友達ができていることが同じ時期に自分の子どもはできない、それがまた親のいらいらになってしまったりとか、言葉で伝えていても子どもにはその言葉がうまく伝わらない。小学校の準備のためと思ってやっていることが、実はまだ自分の子どもにとってはそれを飲み込む力がなくてできないのだけれども、親としては焦りがあって、うちの子はまだこれはできないけれどもこっちのことはできているからこっちを先にしようというふうに、落ち着いて考えればできますが、実際にはすごく難しいところです。

○小田原委員長　　それでは、高橋さん、お願いします。

○高橋さん　　私も含め、今ここに座っている皆さんは、意見や手法、解決策などをたくさん考えられて研究されているんだと思います。しかし、家庭の教育力を向上するために求められているものとなりますと、私たち保護者の場合は、自分自身でそのことを解決する覚悟をしっかりと持っているかどうか。行政のほうも、それをしっかりと知らしめて、的確に自分たちの制度設計を進める覚悟ができているかどうか。これは精神論なんですが、そういった問題が実は一番重要だと思っております。

一つ言いますと、最近の課題としては、インターネットがキーワードとして出てくると思います。それがすなわち携帯電話やゲームの問題になっているわけですが、これは現代に生まれた、過去にはなかった問題であるわけです。ですが、行政側はそれを何とか子どもにさせないようにするというような観点で動いているような気がします。ところが漫画やゲームの文化というのは、世界においても日本の大変素晴らしい文化であるというふうな認識があるのですから、現状としてはこういうことを肯定して物事を進め

ていかなければいけないという感覚が欠如していると思います。親にしてもそうですし、持たせなければ問題は解決するというようなことがあると思いますけれども、そういったことに対しての理解力が大人側に少ない。今どういう状態になっているのかをしっかりキャッチしようという感覚が欠如しているから、やらせないということが横行しているように感じます。つまり、子どもが置かれている環境は日々どんどん進化するわけですから、私たちも含めてそれをしっかりと認識し、理解力を高めて、私たちの責任でしっかり子どもを守っていくということが一番近道なのではないかと考えているところです。

○小田原委員長　　それでは、後藤さん、お願いします。

○後藤さん　　話が多岐にわたっているのですが、今、家庭教育の課題というと、それぞれの家庭が個人主義になっていて、どの親も自分の子だけちゃんといい学校に行ければいいとか、いい会社に行ければいいというような考えを持っている方が多いのではないかと思っています。私は今、中学校ＰＴＡという立場なのですが、何か役員などを募集しても、私は忙しいからそんなことはできませんと言われる方が多いです。それを考えていくと、やはり皆さんに、自分の子どもだけではなくて他の子どものことも見てもらえる余裕がほしいかなと思っています。それと、やはり個人主義になっているから、周りに悩んだことを相談できる環境がないとか、たぶん八王子の中でも地域性がとてもあるんだと思うのですが、私が住んでいるところは八王子駅から近い街中で、八王子まつりのときなどは町会をあげて盛り上がるところなんです。それは家庭の教育力というより地域の教育力というか、子どもは自分だけで育てるのではなくて地域の人にもみんなに育てていただいています。先ほどの叱る、褒めるの話ではないですけれども、子どもを叱るときというのは、人に迷惑をかけたときとか、自分の命に係わるような悪いことをしてしまったときは、本当に真剣に叱らなければいけないと思うのですが、それは親だけではなくて地域に住んでいる大人も遠慮なく叱っていく、そういう力が必要ではないかなと思っています。それをどうすればいいかというのは、先ほど星山委員もおっしゃっていましたけれども、やはり何か問題を抱えている方というのは、例えば今日のような場に行ってみることを勧めても、なかなか足を運んでくださらないんですね。ですので、何か楽しいことをきっかけにして、少しでも出てきてもらえるようにしたらいいのではないかと思います。それの最たるものは、私の地域で言えば八王子まつりかなという気がするのですが、そこで子どもはいろいろな大人とかかわることによって何かしら成長

していったりすると思いますので、できれば行政の方には、出て来にくい親も参加できるような楽しいイベントなどを考えていただければいいかなと思います。

○小田原委員長　　今、３人の保護者の方からお話をいただいたんですが、話が多岐にわたるというのは本当にそのとおりで、先ほどの話から今の話までのつながりがどうなっているのか、あるいは教育委員の皆さんの話がどうつながっているのかというところは、非常に拡散してしまっているわけなのですが、池永さん、高橋さん、後藤さん、それぞれの課題の提起が違う形でもって出されていますが、そのお話を伺って、それぞれの園、学校の立場から、こういうことはこのように考えていってはいかがかと、先ほどの話と重なってくる部分もあるかもしれませんが、そういう観点でお話しいただければと思うのですが、いかがですか。

今井校長、お願いできますか。

○今井校長　　家庭の教育力が低下しているかという大前提があったと思うのですが、私個人としてはそんなに低下していると思っていないんです。格差がひどいと思っているんです。８割、９割の方はしっかり育てていると思っています。ただできていない家庭が５％なのか１０％なのかあるいは１５％なのかというのは、中学校の場合、学校によって違うんです。私はそのように考えています。なので、家庭の教育力というのがもし低下していてそれを伸ばすのだったら、親が権利だけを主張しないできちんと義務を果たすということが大事かなと思っています。よくクレームを言ってくる方は、権利はすごく主張されます。しかし自分のやらなければいけないことは棚に上げてしまっている。親が義務として何をするかというところをきちんとわかって行動していただけると、家庭の教育力は上がっていくのではないかなと思います。そのために公的な機関はいろいろな引き出しをもっていて、経済的なことや非行のこと、あるいは学力の面など、そういうことに関してこういうところに相談すればいいですよという引き出しを持っているんですが、先ほど後藤さんがおっしゃっていたように、その方々が出てこないんですよね。なので、教える時を逸してしまう部分があります。ですから、そういうのを地域の方が、こういうふうにしていけるんじゃないか、あるいは学校に一緒に行ってあげるから相談してみたらどうですかというような形ができてくると、改善できるのではないかなと思っています。

以上です。

○高橋校長　　では、小学校からは２点だけ。

一つは、多くの家庭はしっかりしていると思うのですが、今世の中の風潮として、子どもに迎合しているというような風潮が何となくあるのかなと思います。それを断ち切ってしっかりと子どもにしつけていったり指導していくということ。私は昭和４０年代の子どもだったのですが、その時代と比べると親が子どもにすり寄ってきているかなということをすごく実感しているので、そこを何とかできないかなと思います。例えば全国学力調査で、日本全体なんですが、小学校６年生で１日４時間を超えてゲームをしている子どもが、たしか７％くらいの家庭でいるんですね。それはやはり親もゲーム世代の方が結構多いので、子どものそういう楽しみに迎合してしまっていて、もう遅いから寝なさいとか、宿題をちゃんとしたのかとか、そういうことを置いておいて、子どもがゲームをしたいからそれを認めてしまうというような、そういう迎合感というのが小学校としては気になる部分です。

もう一つは、いろいろ問題がある御家庭というのは、小学校から見ても本当に孤立しています。ですから、そういう御家庭を、学校も地域も行政もどうやって孤立から救い出してあげるかというところで、そこで育っている子どもが将来大人になるときにより良い方向に行くのかなと思うので、そこがとても大事なところかなと。孤立からいかに救ってあげるかというところが大切かなと思います。

以上です。

○塚本園長　　地域というのをどのように考えるかということが、大人にとってすごく大事だと思います。地域と言いましても、例えば大きく八王子市全体だとか、あるいは一つの町会だとか、いろいろな考えがあると思うのですが、地域との連携というのは、実は子どもが地域の皆さん方に見守られているということに係わってきます。そういうことから考えていくと、小さい地域の方が家庭教育をしっかりしたものにしていくためには良いと考えています。例えば一つの町会の中、さらにもっと小さなところというふうに、細かく分けたほうがいいのではないかなと。そうすると、どこどこのおじちゃんおばちゃん、おじいちゃんおばあちゃんというふうになる。「うちのお父さん、お母さんは言わないけれども、こんなことを言ってくれた」「あそこのおじいちゃん、こんなことを言ってくれたよ」という、そういう声が掛かるようになってくることが小さいときにはすごく大事だろうなと思っています。今、後藤さんがお祭りの話をしましたが、多くのところで、子どもたちがお祭りに参加しないけれどもどうしたらいいかというところがよく出てきますが、それは親がどのようにそのお祭りに関わっていくかということ、そ

して地域で子どもたちが安心してそういうお祭りに参加すれば、みんなで「いい子だね」とか「一生懸命やるとこんなにいいことがあるんだよ」とか、いろいろなことを言ってくださる、そういう周りの声が出るような地域であればいいなと思っております。

○小田原委員長　　保護者の高橋さんのお話でインターネットや携帯電話のことがありましたが、それとは別に、池永さんあるいは後藤さんの話の中に、家庭や夫婦のことを相談しづらい部分があるとか、子どもに言葉で伝えるのが難しいという悩み、問題点のお話がありました。また、後藤さんから、家庭が自分たちの子どものことだけ考えればいいというふうになっているので、そうではなくて他の子どものことも見てほしいというようなお話があったわけなのですが、それに関して塚本園長は、地域を小さくすればそれが伝わりやすくなるということをおっしゃっていましたが、教育委員の皆さんはこのような問題や課題についてはどのようにお考えになるか。どなたかいかがですか。

　和田委員、どうぞ。

○和田委員　　いくつか課題が出たのですが、まず池永さんのお話された件ですが、家庭で行うしつけと学校で行う生活指導の大きな違いというのは、しつけというのは理屈抜きなんですよね。親が自分の子どもに対して、一緒に生活をし、自分が責任者であるという自覚を持ちながら、言い方は悪いのですが、有無を言わせずこれは必要だというものをきちんと身につけさせていくというのがしつけなんです。学校で行う生活指導というのは、生活指導を行う側の先生と子どもとの信頼関係や人間関係が前提になっているんですね。つまり、相手を信用できなければそれを行おうという気にはならないし、それではそれをやったらどうなるんだというと、陰で舌を出しているような状況になってしまう。ですから、やはり親は子どもの養育段階でちゃんとしつけるべきものは何かというのはきちんと伝えて指導していくことが大事だと思います。ただ叱ったりしつけをするだけではなくて、同時に親ができることは、子どもが小さいときには一緒にいられる時間が多いと思うので、子どもに本を読んであげるということをよく言いますけれども、本を読んであげるのと同時に、子どもの本でいいので親が本を読んでいる姿を見せることだと思います。そういう中で親が家庭でやるべきことが小さいころにできるチャンスがあって、そのチャンスを逃してはいけないと思います。子どもから多少ごねられるかもしれないけれども、それはちゃんとやっていくべきことだと思います。

　それから、高橋さんから出たことでゲームやスマホについてなんですが、これは否定しているわけではなくて、それを使用するにあたってそれを使いこなせる時期、段階が

あるということなんです。つまり、インターネットもスマホも否定しているわけではなくて、その使い方や活用について自分の自律的な生活ができる段階になれば、使ってはいけないというわけでは全くないのですが、例えば子どもにお金を好きなだけ与えたら好きな物を買ってきますよね。何を買っていいかわからないという状況になってくる。子どもに刃物を持たせれば、刃物の使い方がわからなければ手を切りますよね。きちんと使い方を教えた後でスマホやゲームを楽しむ、あるいは活用するというのが非常に大事なことだろうなと思います。

それから、地域の人や声掛けをするということに関して、正直に言って、地域の力というのは自然発生はありえないだろうと私は思っています。ですから、何らかの形で仕掛けをしない限り、子どもたちが地域の中で自然に遊んだり、声を掛けてもらうことはまずないだろうと思います。その意味でお祭りやイベントが必要になってくるし、かかわりを持つような機会を、自治会であるとかそういうところを使ってつくっていく必要があると思います。

断片的で恐縮ですが、以上です。

○小田原委員長　　他の皆さん、いかがですか。

金山委員、お願いします。

○金山委員　　私もＰＴＡを長くやっておりますので、後藤さんの話にもありました、ＰＴＡになかなか入っていただけないというところは、いろいろＰＴＡ批判もありましたし仕方がない部分もあるんですが、ただ子ども会であったり消防団であったり、大人が大人として育つ機会が本当に今減ってきていると思うんですね。子ども会も今数が減ってきていますよね。というところで今存続しているのはＰＴＡだけだと思うんです。ＰＴＡの中に入ると何が変わるかというと、どの役でもそうなのですが、自分の子どもだけ見ているのでは仕事ができないんですね。少なくともクラス全員、それから会長になれば学校全体を見て自分の子ども以外を見るということができるようになるんです。自分の子ども以外を見るということは、比較もしますけれども、「あの子はこうなんだな、この子はこうなんだな」という気づきが必ずどこかであります。そういう意味で、批判はありますけれどもＰＴＡと等しきものが今は他にありませんので、本当はＰＴＡを存分に使うべきであるし、皆さんにぜひ入っていただきたいと思います。ただ、どうしてもそういうところに足を踏みこめない方、実は２・６・２という理屈があるのですが、２０％の方はＰＴＡに関して熱心に手伝ってくださる。６割の方は声を掛けたら手を出し

てくださって、反対はしない。残りの２割は本当に手も出さないし関わることもしたくないというような話もあります。その残りの２割の方が、今問題になっている関わりを持たない方たちなのですが、でも残りの８割がきちんとした関係性を持てれば、２割の方を引っぱり込めると思うんです。こういうことを考えたのも、前の教育長に「なぜＰＴＡは人を連れて来れないのか。出せないのか。」ということを言われてすごく悩んだ時期がありました。今、学校としては保護者会とかいろいろなことをやってくださっていますけれども、講演会にしても何にしても本当に出席者が少ないです。市の主催で子育ての研修会のようなことを行っても、全市でこれだけですかというような人数しか集まりません。それから道徳授業地区公開講座の後の協議会であるとか講演会も、本当に保護者の方が少なくて、ここへ来ればもっと道徳のことがわかるのになと思うんですけれども、廊下ではしゃべっているけど中には入ってこないという状況があります。ＰＴＡの方は見に来られますので、そこを突破するためにもＰＴＡの役割はとても大きいし責任もあるなと思います。私は、東京都の万引き防止官民合同会議というところに出ているのですが、そこには万引き防止を仕事になさっている方がいらっしゃいます。その方のお話で、あるお母さんから質問されるんですね。「もし万が一、うちの子どもが万引きしたら、私はどうしていいかわかりません。」とおっしゃるそうです。でも、普通だったら「申し訳ありません。すいません。」と謝りにいくんじゃないのと私は思うのですが、それが思いつかないという方がいらっしゃるんです。でもそれはそこだけの話ではなくて、他の学校でも同じようなことが可能性としてはあります。ガラスを割ったら、じゃあお金を払えばいいという話ではないですよね。「申し訳ありません。大変なことをしました。」と謝る親の姿を見て子どもというのは学ぶということがあると思うんです。そういう意味でも、保護者をいかに学校に引き込むか、学校と連絡をとっていただくかということがすごく大事なことではないかと思います。

もう一点、東京都レベルでは幼少中高でＰＴＡの連合体があるのですが、つい先日、都幼Ｐと都小Ｐの方とお話する機会があって、せっかくＰＴＡとして幼小中高でつながっているのだから、幼稚園の方にとったら、将来子どもがどういうふうな育ちをするかというのは、そのＰＴＡの先輩に聞けばわかりますよね。例えば中学校のＰＴＡにしても、上の年齢のお子さんを持っている方がたくさんいらっしゃって、情報がたくさん入ってくるんですよね。そういう意味で、東京都の幼小中高のＰＴＡがうまくつながればいいねというお話をしました。それは八王子の中でも一緒ですので、保護者同士がそう

いう形でもつながって、そこから何か支援することも、これからますます必要になるのかなと思っています。

○小田原委員長　　いわゆる家庭の教育力をどう高めていくかということの前に、課題がどういうところにあるかということを伺ったのですが、今井校長の言葉で言えば、だいたいの家庭はできていて、できていない少ない割合の家庭はどうするかというのが今の金山委員のお話ともつながってきます。そういう家庭の力を発揮できない家庭について、先ほど星山委員はつなげていく力、これが噛み合わなければいけないと指摘されたのですが、コーディネーターだけではなくて、具体的にこういう形でもってその少ない部分を引き出していく、つなげていく、その手立てというものをこのようにしたらいかがかという点があれば星山委員にそれを示していただいて、そこからまた具体的にどうできるかということの御意見を皆さんにお伺いしたいと思いますけれども、いかがですか。

○星山委員　　家庭教育への支援の方略を考えなければいけないということだと思います。やはり初期対応がすごく重要だと思っていまして、新しい学校や幼稚園などの組織に入るとき保護者はすごく不安なので、実はそこがチャンスではないかなと思っています。1年生のときにいかに良い体験をするかというところではないかと思います。いきなりＰＴＡの役員を決めるところから入ったりすると、なかなかつらいところがあったりだとか、こうしてくださいと言われても、いろいろなお子さんがいらっしゃっていろいろな家庭の事情があるとなかなか難しい面もあるので、最初に、ここに来たらいいことがあって、自分も何か得られそうだという体験をしていただくためには、私はやはり食べ物かなと思っています。先日テレビを見ていると、地域で毎週炊き出しのような形で、夕飯を一人で食べている子どもたちは、その地域でお手伝いをして夕飯を一緒に作ったり一緒に食べようということを行っている地域があるそうです。これはとても素敵だと思いまして、人は楽しいことや食べることや生活に関してだったら来るのではないかなと。その辺のところで来ていただいて、ちゃんと食べるとか早く寝るというところも巻き込んでいくための方略というのがまだまだたくさんあると思うんです。私が先ほど昭和の時代にヒントがたくさんあると言ったのは、寺子屋なんかもすごくいいと思いますし、縁側というスペースもすごくよかったし、あと、小さいころリヤカーの後ろをくっついて歩くのがすごく楽しかったんですが、ああいうものもなくなった。それから道草をして、話を聞いてくれるおばちゃんがいる駄菓子屋さんもなくなった。昔の子どもたちはいろいろなところで教育を受けていたと思うのですが、今は家庭と学校だけになり、家

庭がちゃんとしている家はいいけれど、そうでない家は難しくなったのだと思います。

話は戻りますが、叱る、褒めるというのも家庭の機能によって非常に段階がありまして、家の中できちんと見守られてきちんと愛情を受けて安心できる環境さえ与えられなかった子どもたちがいます。そうすると、集団の中に入っていきなりルールを守ろうと言っても、ルールを守るといいことがあって自分たちは守られているんだということさえわかっていない。そこはまさに家庭の教育力への支援だなと思うんです。そこで家庭に何をしなさいと言ってもできない層が何％かいらっしゃる。というと、やはり皆を巻き込んでいかに仕掛けをつくっていくかというところではないかと思いますので、地域の中でどういうところに行けば家庭の教育力が得られるのかというマップのようなものがあるといいのかなと思います。学校がどこにあるのかは知っていますけれども、どこで何をしているのかということがもう少しそれぞれ見えるようになると、困ったときここに行けばいいというのがわかってきて、結果として教育力というのは上がってくるのかなと思っています。

以上です。

○小田原委員長　　社会も変わっているし、家庭も変わっている。縁側の話が出ましたけれども、縁側なんていうのはほとんどもうないですよね。リヤカーも探すことが難しいということになるわけですが、ではどうするかということについて、今のお話を伺って、どなたか具体的にこういうことを考えてはいかがかというような御意見はございませんか。

今井校長、どうぞ。

○今井校長　　家庭力が低下しているところをどうするかということだったら、一つは当事者性をもつグループが声を掛けることだと思います。当事者性といえば、やはりＰＴＡだとか同じクラスの人とか、こういうところが一番力を発揮すると思います。

それから地域性。例えば学校で言えば、スクールソーシャルワーカーを含めてなんですが、民生委員や保護司など、わりと各町会を担当している方がいますので、もし子育てで困ったときには遠慮なくそういうところに相談できるようなにつなげてあげればいいかなと。元八王子中学校の場合には隣に子ども家庭支援センターがございまして、本校の場合も不登校で困っている生徒など、そこに子どもをつなげるのではなくて保護者をつなげることによって子どもが登校するようになったりということもあります。

あとは専門性です。やはり専門性を持ったところにつなげていくことだと思います。ですから、当事者性、地域性、専門性、これらをうまく家庭の教育力がなかなか難しい

なというところにつなげてあげれば変わってくるのではないかなと思います。

以上です。

○小田原委員長　　高橋校長、どうぞ。

○高橋校長　　先ほど星山委員から食べ物というお話があったのですが、私の知る限り、八王子の小学校の区域で、どんど焼きなどの地域行事を、ＰＴＡや地域の青少年対策委員会などと学校が一緒にかかわって、お餅つきをしたり豚汁をつくったり、それをみんなでわけて食べようというようなことが、比較的八王子では多いのではないかと思うんです。先ほど孤立しているということを申し上げたんですが、こういうところにそういう保護者も巻き込んで、あとＰＴＡの各クラスのつながりを大切にしてもらえると、孤立している人が何らかの情報をクラスのお母さんなり学年のネットワークの中で情報をもらって、これなら大丈夫とか、こうやってみようとか、そういうことが広まっていくのではないかなと思うので、その地域に今あるものを大切にしつつ、ＰＴＡの活動を有効にうまく使っていくと、孤立して子育てに不安な家庭が減っていくのではないかと思っています。

以上です。

○小田原委員長　　高橋さん、どうぞ。

○高橋さん　　今のお話は、実は保護者が主体の話でございまして、私どもが答えるべき話だったと思うのですが、今おっしゃっていたようなことは間違いなくやっているんです。やっているのにうまくいかないからどうしようという話が、今日の主眼だと思うんです。ですから、先ほど申し上げましたように、実効性のあることをどうしていかなければいけないかを指導するのは行政側にあるんだという話をしているんです。一義的な子どもに対する責任は間違いなく保護者にあります。けれども、制度をつくったりいろいろな施策をたくさんつくっても、私たちに説明する機会がないんです。インターネットで今日のテーマの家庭の教育力を調べると、文部科学省のページがまず出てきます。すごい量です。それをちゃんと理解して私たちに説明するのは行政の責任なのではないですかと言っているわけです。そこを明確にしてもらわないと、親が悪いという話にどんどんなっていってしまいますよね。

そして、先ほどのインターネットの件ですが、和田委員が私の意見に対して、こういう場で対立軸を持つような意見を言っては困ってしまうんですね。私も反論しなければいけない。刃物の例を挙げていらっしゃいましたけれども、刃物だったら私もちゃんと

教えます。だけど、刃物だって刃物を知らない親がいるでしょうという話をしているんです。親が刃物を知らないから子どもに教えられない。だからやめさせるというのがおかしいんだということを言っているわけです。インターネットの使い方を知らない親や教育者や行政側が多すぎるということを言っているんです。皆さんが疑問に思うことは、現場で体験している私たちに聞いていただければいいのであって、その意見を尊重してもらえるような機会にしてもらわないと、発展的な結論には結びつかないんです。現場はすごく泥臭いんです。格好良くないし、上手にはいかないし、今言われたことは全部やってきていますし、その上でどうするのかというのを国がいろいろ施策を考えているのならば、ちゃんと指導して簡潔に説明できるようにすることが行政側の責任であるということを軸に進めてもらわないと、家庭の教育力の向上にはなかなか結びつかないのではないかということです。

以上です。

○小田原委員長　　結論は急ぐつもりはないのですが、今日の話の中で今日の皆さんの話をまとめて一つにするというのは非常に困難だと思っていますので、まとめられればまとめたいということになると思うのですが、それぞれのところでどういうふうに考えているのかということを出していただくことによって問題点が明らかになる。問題点が明らかになっていくとそれに対してどうしなければいけないかということになっていって、これは行政として考えなければいけないことを一つ一つ整理して具体化して皆さんに示していくことになるだろうと思います。

今、高橋さんのお話にも高橋校長のお話にもあったんですが、いろいろなことをやっていてもなかなか、例えばＰＴＡの会議に出てきてほしいのだけれども出てきてくれない。それをいろいろなことを企てることによって何とかうまくいくのではないかというふうに言うのですが、ではうまくいかない部分を具体的にどうしたらいいのだろうというところがもう少し具体的に出てくるといいと思うのですが、どうでしょうか。

教育長、どうぞ。

○坂倉教育長　　公の役割や政治の役割というのを少し見てほしいなと思ったのですが、自分なりに思ったことがあるので少しお話したいと思います。

星山委員のお話の中で、日本の家庭は非常にまじめだというお話があって、その中でも教育力のない家庭への支援が必要であるということで、キーワードとして人づくりとか仕組みづくりとか楽しみで引き出すことというのがあったわけですよね。そこのとこ

ろで行政側が今行っているのは、例えばコーディネーターの研修もやっていますし、仕組みづくりもやっていますが、現実的に引っぱってくるというのは、その当事者が頑張らないといけないと思うんですが、その中で２つありまして、一つは行政が、特に地域運営学校なんかをやっていて、もっと今よりも多くお金をかけていかなければいけないかなと思っています。それは、ダイレクトに中に入るのではなくて、お金をかけることによってそこが動けるような形にしていきたいと思っています。

もう一つは、お父さんというのをどのくらい活用していくのかということを思っています。ある地域運営学校でお母さん方が一生懸命苦労してやっていますけれども、ニュータウン地区なものですからお父さん方は地域に地盤がありません。どちらかというと皆さん働きに出ていらっしゃるので地域に友達がいません。そこでどのようにやったかというと、おやじの会のときにお母さん方が言ったのは、「あなたがいないと駐車場管理をする人がいなくて混乱してしまう。ぜひ駐車場管理をあなたにやってほしい。」ということで、そのようにやってもらいました。一日終わって、せっかく終わったんだから隣の人と一緒に飲まないかという感じでやっていって、まさにコミュニティづくりからつくるコミュニティという形で始まっています。

もう一つ、ニュータウン型の地域運営学校なんかで行っているのは、児童厚生員や保護司ＯＢの方々にお願いして、いわゆる教育相談センターとは言いませんが、そういうものをつくって、子育てに慣れていないような方の相談を受ける窓口をつくると、学校に直接愚痴を言うのではなく、そこを通して相談をして、自分も子育てに自信を持っていくということもあります。

具体的な形というのはやはりその地域ごとに合わせた形で行っていかなければいけないと思うのですが、そのとき我々が何をするかというと、そういう仕組みに対する支援とかコーディネートする人たちの研修の支援とか、もっと言うと、なかなか今ソフト部門で人間にかかわるところというのは予算をとれないんですね。しかし本当に新しい好機をつくっていくためにはそういうところにお金がいるのであって、だから、もう少し国の制度よりもつけてくださいという努力がいるのかなと私なりに思ったところです。ダイレクトに育てていくのは我々ではできないと思うので、直接はＰＴＡや学校運営協議会の皆さんなどにやってもらうけれども、そこを支援するような仕組みづくりとか、財政的にも今より少し保障していかなければいけないかなと思っています。

○小田原委員長　　もう少し財政的な支援をしなければいけないというときに、できるかと言

えばなかなかできないわけですよね。もう少ししなければいけないというときに、ではどうしたらできるかというところまで言えますか。

○坂倉教育長　　委員長がおっしゃったように、ここで結論は出ないと思うんです。この話だけではなくて他の話も含めてなんですが、今日共有されたのは、家庭がいけないわけではないけれども、こういう時代の中でなかなか子育てに慣れていない家庭ができてきたりしていて、パーセントはわかりませんが、大多数の方は自分の子どもも他の家の子どもも含めて良くしたいのだけれど、やはり何となくこのままでいいのかという状況があるのだと。だからこそこれをやったんだと。それを解決するのに、もちろんおのおののところで努力しなければいけないんですが、行政がやるとしたら、具体的な仕組みづくりに何がいいかというのはもう少し担当で話していただければいいんですが、そういうものにお金をかけなければいけないという声が強くなれば、これだけ問題視していて、それは家庭が悪いわけでもなくて、もちろん一部そうでない方がいらっしゃるのも事実ですが、それも含めてみんなで良くしていくためには、もう少しできることがおのおのあるというときに、やはり行政が行うのは仕組みづくりとか組織づくりに対しての予算確保だと思っています。それを具体的に、これをもう少しと言えば、例えば時給年俸で言うと、コーディネーターのお金をもう少し増やしてほしいと言えばそれは頑張ってみたいと思っていますし、そういうところはやってみたいと思っています。

○小田原委員長　　なかなか話がまとまっていきませんが、今日並んでいる私たち以外の皆さんの中で、今までのお話を聞いて、こういうところはもう少し突っ込んで話をしていただきたいというようなことや、あるいはこういうことについてはどうなんでしょうというようなお話がありましたらお伺いしたいと思いますが、いかがでしょうか。遠慮なさらずに、どうぞ。

○ナカヤさん　　小学校の学校コーディネーターと、小学校のサポーターをしており、中学校ではＰＴＡの役員をしております、ナカヤと申します。

　先ほど、楽しいことをしたり食べ物があれば、家庭力がなかなか厳しい家庭も出てくるのではないかという話を聞いて、そこに関して普段から疑問に思っていることを一つお話させていただきます。本当にＰＴＡの方やおやじの会、また学校の先生など立場的にいろいろ活動されているのを、とてもよくわかっております。また、町内会の役員もしているので、町会や子ども会で一生懸命やっているのも存じております。その中で、今放課後子ども教室というものも立ち上がって、地域のボランティアの方にも入っても

らって、いろいろな課題をクリアさせていただいているのですが、最近、飲食に関わるところで、どうしても子どもたちの口に入るものなのでだめですということがどんどん言われてきております。あとＰＴＡでも、ＰＴＡの活動費は各家庭からいただいているので、均一にわけなければいけません。飲食に関わるものにしても、それはだめですということで、食べ物を出したくてもどんどん出せなくなってきている現状があります。八王子まつりのように大きな規模で行う行事だといいんですが、先ほどつながっていくためには小さいところで活動していったらいいというお話がございましたが、なぜか飲食に関してはどんどんそこにかけられるお金がなくなってきて、みんなで食べようというボランティアの方が持ち出してくださるものだけで支えられている現状ですので、みんななぜこうやって思っているのにうまくいかないのはなぜだろうと考えると、やはり飲食かなと思ったので、そこだけ相談というか、お話させていただきました。そこら辺で何か明るい話題があればと思います。

○小田原委員長　　今のお話についてどなたかお話しできますか。

教育長、どうぞ。

○坂倉教育長　　子ども子育て新制度ができた中で、いわゆる学童をどこまでのばすかということに非常に関係してくるのですが、今、厚生労働省と文部科学省の中で、いかに安くできるかというところがあって、非常に苦労していると思います。一方で瑞穂町であったような飴をあげて女児が一時意識を失うというような事件があって、非常に厳しいです。このままでいくと、昔の児童館とか学童のような話になってくると思うのですが、なんとか新しい放課後子ども教室の制度をつくっていきたいと思っています。そういう中では、今の学童と同じような母体、場所によってはＮＰＯがやっていたり社会福祉法人がやっていますが、そういうところが上手に人を使いながらやっていく中で、食べ物の壁はあるんでしょうけれども何とかできないかということで今考えさせているんですが、非常に監査も厳しいし、こんなのではできないと毎回言っているんですけれども、そこは今一生懸命考えつつ、新しい形を少しずつ入れていますので、またそれを拡大していきたいなと思っています。

○小田原委員長　　ナカヤさん、それでよろしいですか。

○ナカヤさん　　今後に期待します。

○小田原委員長　　ということですが、今のお話を聞いて、どなたか何かありますか。

それでは、その他にここをもう少し突っ込んでお話してほしいとか聞きたいというよ

うなことはございますか。

はい、どうぞ。

○コニシさん　　私もナカヤさんと同じで、学校コーディネーター、学校サポーター、学校運営協議会委員、ＰＴＡ役員など、小中高と子どもがいまして、いろいろ関わっているコニシです。

家庭の教育力をどうやって上げていったらいいのかというのは、すごくいろいろな要因とか方法とか深いものがあると思うんですが、やはり私たち大人がいろいろな人と出会ったりしながら、自分一人で育てているのではないという思いとか、いろいろな人の価値観や目線で子どもを育てる安心感とか、私たちの気持ちが安定していることがすごく重要だと思っています。そんな中、学校の中や放課後子ども教室の中で子ども同士のトラブルがあったとき、どうしても私たち大人が追及してしまうのは、その責任の所在はどこにあるかというところで、私はそこにすごく違和感を感じています。それは家庭にとっても同じで、自分の子どもが悪さをしたらその責任は親、家庭にあるでしょというように問い詰められてしまうような、そんな不安感を親も感じています。私は、みんなで育てることがとても大切だと思っていて、子どもにとってもそれが豊かな視点で育てられるという点で大切だと思うのですが、何かが起きたときに私たちが一緒にチームになって、この子はどうしてこうしてしまったのか、どこにつなげてあげればいいのか、一緒に謝りにいこうか、どうしたら解決できるかというように、垣根を取り払って取り組むこと、そういう大人の姿を見せることが非常に大切だと思います。それがまた一つ、親が安心して、家庭でこの子の評価を自分の評価としないで愛情をたっぷり与えられることにもなるし、どうしても子どもがいる現場はその責任の所在を求めてしまうところがあってとてもつらいので、そこの垣根を取り払うにはどうしたらいいんだろうなと常々思っているので、どなたか意見をいただければと思います。よろしくお願いします。

○小田原委員長　　後藤さん、どうぞ。

○後藤さん　　それに関しての答えにはならないかもしれませんが、先ほどから家庭の教育力はそんなに落ちていないのではないかという話が出ていましたが、私は八王子市の家庭教育８か条が出たときに、もう八王子の家庭は終わったなと思いました。あそこに書かれていることは、親として当然の義務であることしか書かれていません。朝ごはんを食べさせようとか、早寝・早起きをさせようとか、私が子どものときには当たり前のように親から習ってきたことばかりです。

コニシさんのお話で、垣根がどうというのは、親に自信がないと思うんです。私も親として自信があるかと言えば全くありませんが、できるだけ一生懸命子育てをしたいと思っています。それは生んでしまった以上、子どもを立派な大人に育てて、社会のためにちゃんと働ける大人に育てなければいけない責任があると思っているので、今一生懸命子育てをしています。それで、大人に自信がないというのをどうすればいいかということをいろいろ考えていたんですが、私の長男が中学生になって、思春期で反抗期でもうどうやって育てたらいいのかわからないとなったときに、八王子市の思春期の子育て講座というのに参加させていただきました。そういうものをもっと広く皆さんに知らせていただける宣伝活動とかもしていただければいいのではないかと思います。なかなかそうやって悩んだりしたときにどうすればいいのかを近所の方にも聞けないし、自分の親が遠くにいる方は本当に子育てに困ると思うんですが、そういう講座などをやっているというのをもっとたくさんアピールしていただければいいのではないかと思います。

答えになっていなくてすいません。

○小田原委員長　　教育長、どうぞ。

○坂倉教育長　　今の答えになるかわかりませんが、先ほどのことも含めて、今の考え方ですと放課後子ども教室はとりあえず食べ物を出さないということを方針にしています。ただ、全てがすべて一律ではなくてもいいのかなと思っています。そういう意味では、例えば授業や勉強をしているようなところもあるでしょうし、お菓子作りなんかをするところもあるとすれば、それはそれでおのおののところであっていいと思うのですが、その場合は、そこに通う子どもの保護者すべてから一筆とる必要はあるかなと思っています。もちろん、まったく全部を任すわけにはいきませんが、了承していますというような承諾を得ることをしたときに、できるかどうか。要は、各教室の自主性あるいは裁量権がどのくらい増えるかというのは少し研究させます。ただ、一律にすればやり方によってはうちはできないというところがたくさん出てくるし、どうしてもいろいろな家庭がありますからいろいろな方がいると思いますが、必ずしも一律ではなくて、何とかできる方法はないかということについては、少し研究させようかなと思っています。

○小田原委員長　　話がまとまらないうちに予定していた時間がきてしまったんですが、皆さんお集まりの中で、これだけは聞いていただきたいということがあれば、お願いしたいと思います。

では、どうぞ。

○冨所校長　　宇津木台小学校長の冨所と申します。

今、家庭の教育力ということで、教育長を始め、多くの方がお話された中で、私たちは学校教育を通じて、私で言うと宇津木台小学校区をめぐる地域の方や保護者の方とつながりを持ってやっているつもりではあるのですが、なかなかつながり感というものが持ちにくい時代に入っているなと感じているところです。先ほど星山委員がお話されましたように、おそらく各学校で、保護者や地域とのかかわりの中でＰＴＡの力を借りながら、つながり感のある活動というのが多様に行われているんだと思います。そのことをあまり共通認識できていない側面があるのではないかと思っています。

もう一つ、私はいつも教育力の話をするときに、今教育の中で一番失われているものは、癒しという機能ではないかと思っています。不登校であれ、特別支援の子どもたちであれ、みんな一生懸命に生きようとしていることは間違いないんです。ただその中で、学校はどちらかと言うと縦方向に引っぱり上げるような意識というのがあって、それよりもむしろ横のつながり、それは保護者だったり地域だったり、あるいは子ども同士だったり教師と子どもだったりするわけですが、そういう横のつながりを十分に体験させる、あるいは味あわせていく中で、初めて癒しの機能から伸びていく機能にいくのではないかといつも思っています。教育の中では、子どもたちの自立のためにと言いますけれども、私は、自立の前に依存があって、困ったときに先生や保護者に尋ねる、そういうふうに子どもたちの心を開くようなことを丁寧にやっていくことが、実は家庭を高めることにもなるし、学校自身の力を高めることにもなるし、ひいてはそれが地域の教育力の総合的なセーフティーネットを築き上げていく力にもなっていくのかなと思っています。その癒しの機能を、ある教育学の言葉で言うと「ケア」と言います。それは看護学とか医学の中で言われている言葉ですが、私は教育の中に「ケアリング」という考え方をもっと大事にしていく必要があるのではないかと、お話を聞きながら思いました。

以上です。

○小田原委員長　　ということでございますが、もう一人どうぞ。

○マキタさん　　最初に発言された方とほぼ同じなのですが、私も放課後子ども教室で子どもたちの宿題を見ているのですが、ボランティアと言いながら、学習の方は1000円報酬をいただいています。これは何時間教えても、1回1000円ということです。私の場合は、小学校の先生と高校の先生で定年退職した先生方を引っぱり込んで、この方たちと一緒に看ているんですが、定年退職した先生方なので、子どもたちからすればおじいちゃん、

おばあちゃんということで、子どもたちは学校の先生や保護者に言えなくても、安心して相談してくるんですよね。そうすると、今２人までしか認められてないんですが、やはり３人、４人欲しいなと思うときがあるんです。ですから、２人という上限を取っ払っていただけるといいかなと思います。先ほど褒めることとありましたが、特に宿題をしている子どもたちを見ると、漢字の書き取りをしていることが多いんです。子どもたちは宿題が終わるとすぐに外で遊びたいというのがあって、先生に３回書いてきなさいと言われると３回急いで書いて行ってしまうんですけど、丁寧に書いているとのぞいたり、あわてて書いているのを見て「もう少し読める字を書いてよ」なんて言うと、本当に丁寧に書いてくれて、そして次の時間に「先生から花丸もらったよ」ということで、やはりおじさん、おばさんが褒めると子どもたちは丁寧に書いてくれて、花丸もらったよとノートに書いてくれるんですね。そういうときすごく嬉しく思うので、もう少し余裕ができるように２人という上限を取っ払ってほしいと思います。

あと、飲食の件ですが、土曜日にサタデースクールということで、今でも継続して行っているのですが、以前、災害訓練ということで、起震車や消防車を呼んで、防災課から災害食をいただいてそれを食べたりしていたんです。でも災害食はそのままだと少しくせがあって食べにくいので、そのときにカレーを作ってカレーをかけて食べるとおいしくいただけるのでやろうとしたところ、認められなかったんです。例えば、じゃがいもはやにんじんはこうやって切るんだよとか、切り方を教えるために１個だったら買ってもいいということなんです。でもカレーを作って食べるとなると、個人のおなかに入ってしまうのでだめだということでした。

○小田原委員長　　お話の途中で申し訳ないのですが、家庭の教育力の話をしていますので、今の話は要望ということで、お伺いしておきます。

○マキタさん　　そのようにお願いしたいと思います。

あと、お父さんが家庭の教育から少し離れているということで、以前、青少年委員というのがあって、そのときに親子ふれあいキャンプというのが２泊３日であって、お父さんと子どもの参加がすごく多かったんです。ですから、またこれも復活できないかなということで、この２点、お願いします。

○小田原委員長　　司会・進行の不手際で、まとまらないまま時間になってしまったのですけれども、今日お集まりの皆さんで、最後これだけはというお話を伺いたいと思います。

塚本園長、どうぞ。

○塚本園長　　日ごろ感じていることで一つ言わせていただきたいことがあります。それは、笑いというのは非常に生きる原動力になるのだろうということで、笑いが起きるような家庭がとても大事だなと思っています。それは、本当に心から自分を出せるというときではないかなと思っています。そのときの顔、そしてそのときの心、こんな素晴らしい時間を持てたら、子どもは本当に幸せなんだろうなといつも思います。こういうことは、地域の人たちも家庭の人たちも学校の先生も、みんなでできるのだろうなと思っています。これがまず一つなんですが、その裏を考えて見ていますと、子どもたちの中で、心の拠りどころを得られる子なのか、得られない子なのか。この違いが家庭の教育ということに非常にかかわってくるのだろうと思っています。例えば、心の拠りどころが得られるという子どもを見ていますと、その子どもの姿をそのまま、特にお母さんが一番いいと思うのですが、やはりお母さんに小さいときから育てられた、その表情のすべてが、体全体が、以心伝心でその子どもに伝わってくる。つまり、それが心の拠りどころになるということで、お母さんの「それでいいよ」という言葉を聞いたときに、子どもは本当に自分が育まれていて、愛情の中で育っている。そしてこの人は自分を信頼してくれているんだなとやがて伝わっていく。そういう原動力になっているんだろうなと思っています。それは心の安定感につながっていって、だんだん年齢が上がるにしたがってそれが子どもたちの一番の資質と言いましょうか、心の糧になっているのではないかなと思います。これが、家庭の教育力を上げる一番の根源ではないかと思っています。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

それでは最後に、高橋さん、どうぞ。

○高橋さん　　今日は、保護者がもっと協力できる環境をつくってくださいと言いに来たつもりだったんです。私たちの仕事は、こういうことがありました、こうしたらいいだろうという話をするのではなくて、ここにいらっしゃる方で、解決をしなければいけないことを解決するためにいるんだと思います。私が教育長にお願いしているのは、私たちはちゃんとやるから保護者にいろいろなことがちゃんと伝わっていく仕組みを作ってほしい。ただ、ＰＴＡというのは、皆さんからいろいろお話がありましたが、行政と違って子どもが卒業するとなくなってしまうんですね。今日聞いている私は来年はいなくなってしまいますから、そういった政策的なことまで引き継ぐことができないわけですから、まず行政側にとっては仕組みだと思っていただいて構わないと思うんです。そういう中で、今日いろいろなことが政策で決まったり、制度設計がされたら、それを動かすため

にはどうしたらいいんだろうかということを、今まで以上にたくさん発信をしていただくことが大変大事だと思っているということを伝えたかったんです。そうなれば、私たちはそういうことを理解して、ＰＴＡがしっかりと協力をしていくというような形になっていくと思っております。つまり、三位一体の会議体をつくってくださいというお話をしたんですが、要は、こういう機会がたくさんあるといいなと思います。

以上です。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

時間になってしまいましたが、教育委員の皆さんで、最後にこれはお話したいということはございますか。

金山委員、どうぞ。

○金山委員　　今、いろいろとお話がございましたけれども、教育長が言いましたようにいろいろなことを私たちも考えてさせていただきますので、ただこういうことを良くするためには上からだけでは絶対にだめで、下からだけでも絶対にだめなんです。ですから、私たちもいろいろ発信をさせていただきながらいろいろなことをさせていただきますが、今日来られた皆さんは、おそらく何かの形でかかわっていらっしゃる皆さんですので、皆さんの方からもいろいろ、細かいことをやっていただく、例えば今井先生がおっしゃっていたことのもう一つ前段階のこともすごく大切だと思っていますので、御協力をいただきたいというお願いで終わりたいと思います。

○小田原委員長　　ありがとうございました。

先ほどから申し上げておりますとおり、進行の不行き届きによりまして、御質疑で皆さんに言いたいことも言ってもらえなかったと、大変申し訳なく思い、お詫び申し上げます。

時間も超過しておりますので、これで公開討議を終えたいと思いますが、小林課長に締めをお願いしたいと思います。

○小林教育総務課長　　皆様、長時間の討議ありがとうございました。

私のほうで締めということでしたけれども、本日のまとめと閉会の御挨拶を小田原委員長からいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○小田原委員長　　このまとめをするというのは大変難しいことでございまして、いろいろとお話いただいたんですけれども、焦点を絞りきれず、お話が中途のまま終わることを大変申し訳なく思っております。一つだけ申し上げますと、今日お集まりの中では私はか

なり高齢で、一番年上のような気がしますが、私の子どもの頃を思いますと、家庭の教育力ということを考えれば、今のほうがはるかにあると思います。私たちが子どもの頃の親というのは、小学校や高等小学校で終わったというような親たちでありまして、私たちの勉強なんてとても見てもらえないという親が多かったわけです。それでどうかというと、はしかもいつしたかわからない、疱瘡もいつしたかわからない、だけれども大人になってから看てもらったときに、もう終わっているというような話なんです。ですから、そういうことを考えると今の家庭の教育力というのはかなり高いと私は思うんです。ただ、御指摘いただいたような問題点や課題というものはあるわけです。それをどうして解決していくかということは、横のつながりとか、あるいは癒しのお話もありました。そういう部分をどういうところでつくっていくかというと、先ほど教育長から学校運営協議会のお話がありましたが、昔は学校の先生が先生の住んでいる地域のお祭りに子どもを呼んだり、あるいは先生と一緒に昆虫採集に行こうとか植物採集に行こうとか言って誘ってくれたりしました。それから、修学旅行に行けない子どもたちのために学年で手拭いを縫って、袋を作って、イナゴ採りに行って袋にたくさんイナゴを採って、それを売って、修学旅行に行けないような子どもの資金にしたというようなことを、学校がやっていたんですね。今それを学校にやれと言ったら怒られてしまいますが、そういうことができるような学校運営協議会ができて、そこにお祭りの話もあるし、何かの集まりもあるし、放課後子ども教室もそういうところでやっていくということにしていけば、今いろいろ出てきた問題の半分くらいは解決していくような気がします。そういう大きな形で、小さいところにまで浸透していくようなことを考えていきたいなというようなことを、今考えています。行政の皆さんのところで、今日いろいろ出た問題を整理して、そしてできるところはどういうところかというようなことをまた発信していきたいと思います。対立軸をつくるのではなくて、三位一体で考えていく、そういう機会や方向性をさらに探っていきたいと思います。

さらにまた機会をつくって、そこでまた御意見を頂戴できればと思っております。今日はお忙しい中お集まりいただき、本当にありがとうございました。これで公開討議を終わりたいと思います。

ありがとうございました。

【午後４時３７分閉会】